

ている昆虫も含めて紹介したのだったが、取材に苦労したのは、ナナフシやオトシブミなどより、テントウムシやアメンボの方だったという。どこにでもいると思っていたら意外に見つからず、捜しているうちに取材の時間がなくなってしまったというのだ。

『ありふれていると思っていた昆虫が姿を消している。自然の減少、というのか、ぼくらの生活環境の変化がしみじみわかった』と、担当記者はため息をついていたが、このような自然破壊をどう考えたらいいのだろうか。おそらく、多くの人たちが同じようにため息をついていることと思うが、こうした思いを集め、データで裏打ちし、自然を守る運動の世話をするグループが生まれれば、私たちは教えられるところが多く、さらに踏み込んだ記事を書くことができると思う。

そしてまた、いま子供たちがおもちゃとして付き合っている生き物を、人間の仲間として見るようになるためには、これからさまざまな自然を理解していく過程が必要になってくる。小さな生き物と、心おどる出会いを繰り返して行ってほしいと思う。そういう世話をしたり、機会をつくったりするグループが生まれたことはとても重要なことで、私たちはすばらしい人たちと知り合えたと喜んでいる。



## “県下のFavoniusについて”

(オオミドリシジミ属)

岩村 巖

6月の声を聞くと、どうしても一度はその姿をみたくて出かけるものにFavoniusがある。朝な夕なにあの金属様の青緑色の翅をきらきらさせて、食樹のまわりをとびまわっている姿は実に美しいものであり、このような生物を創造した自然に感謝したい気持ちになる。

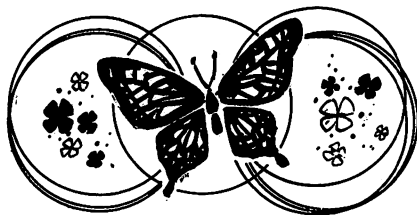
もう20年以上もむかしになるが、私が蝶に興味をもち、図鑑等を通じてZephyrusとよばれる美しいシジミチョウの一群がわが国にすんでいることを知り、近くのクヌギ林で初めてオオミドリシジミを手にした時のあの感激は今も鮮明に私の脳裏に残っている。それ以来、シーズンになれば県下のあちこちへ、これらグループの姿を求めて10mにもなる長い竿をかついで出かけるのが私の年中行事の一つになってしまった。現在、私の標本箱には、オオミドリシジミ以外にも、これらミドリシジミ属のグループの蝶がかなりおさまっているが、その個体数と種類数が次第に増すに比例して、県下の色々な所で、これらの蝶がその生活をおくっていることも明らかになって来たのである。

現在、兵庫県下には、日本産Favonius6種の内、クヌギ、コナラ等の林のある所であればたいがいその姿を見うけられるオオミドリシジミを筆頭に、ウラジロミドリシジミ、ジョウザンミドリシジミ、エゾミドリシジミ、ヒロオビミドリシジミ、ハヤシミドリシジミ等が6月上旬～7月中旬にかけてその姿をあらわすことが知られている。ヒロオビミドリシジミは県西部の佐用郡下に主な産地があることが知られており、岡山県との県境に散在するナラガシワ林にすみついている。この種類は、比較的最近になって、今までハヤシミドリシジミ等と混同して取り扱われていたものを、独立の種として分離されたもので、後翅裏面の白帯が他のどの種類よりも太い所からこの種名がつけられたようである。産地における個体数は決して少ない方ではないが

自然状態においてはナラガシワしか食べないこともあって、産地は局限される傾向がある。6月上旬頃より出現しはじめるが、中旬頃が最盛期であり、下旬には大破した個体が多くなる。同じ時期に同じ産地で発生するウラジロミドリシジミは、翅形及び翅の班紋の特異性によって他の種類と混同することのまずない種であり、大きさもやや小型である。これら両種は食樹の関係もあって、産地が一致している事が多い。

一方、より北部の山地に入るとヒロオビミドリシジミと近似種のハヤシミドリシジミが多産する所がある。食草がカシワに限定されているのと、県下におけるカシワの分布が極限されている関係もあって、産地はヒロオビミドリシジミにくらべてさらに限定されており発生時期も約20日ほど遅れて7月上中旬頃がその最盛期となる。同じ県北部の地に、ジョウザンミドリシジミ、エゾミドリシジミの両種も生活していることが知られており、その産地もかなり広いのではないかと考えられるが、今の所まだ十分な調査が行なわれておらず、詳しい所はわかっていない。

近年、建築材の生産のために、天然の広葉樹林の伐採がすすみ、より経済性に富み、より成長の早いヒノキやスギ等の二次林へと人為的に変化させられつつある。このことは、われわれのような蝶に関心をもっているものにとっては大問題であり、クヌギ、コナラ、ナラガシワ等の広葉樹をその食樹としている *Favonius* 属にとっては死活問題であろう。以前発見した新しい産地が、数年後にはスギ林に変化してしまっていて、がくぜんとした経験は私だけでなく大方の人が一度や二度は味わわれたことと思う。このような現実をまのあたりに見るにつけ、早急に県下におけるこれらグループの正確な分布を調査し、食樹林の保存を関係機関に働きかける必要性が痛感される。これらの愛すべき小動物が、この県下からその姿を消してしまうことのないよう何とかわれわれの力で努力したいものである。



## ギフチョウの 飼育について

玉田 作次

前からカンアオイを少しばかり植えていた所、去年の或日、本会の木村先生から四月になればギフチョウの卵を少し分けてあげようと言われた。それからは幻の蝶の食草カンアオイの手入れを一層念入りにし、虫卵の届くのを一日千秋の思いで待っていた。五月五日になって木村先生が日ノ本学園に來られ待望の虫卵を13コ戴いた。2、3コはふ化していた。5月7日には全部幼虫になった。その13匹が一枚の葉の一ヶ所にびっしり体を寄せ合って集団を作るのである。

早速疑問が湧いた。蚕とちがって何故集団を作るのだろうか。

微量で動物の特定行動を誘起するものとしてはフェロモンがある。それも色々な感覚器官を刺激する。時には経口的に効くものもある。案外その外の原因かも知れない。例えば細い細いあの糸が集団を作る原因かも知れぬ。その他世話しながら色々考えた。しかし手をつける間もなくアットいう間に5月も過ぎた。6月1日には前蛹になった。

飼育してみると色々な疑問が次から次に出て来て科学心を呼びおこすものである。前述の幼虫の集団化の原因を好く利用すれば、害虫のアメリカシロヒトリ(集団となる)も一網打尽にされるはずである。

日ノ本学園の生物部は昆虫の飼育から出発しよう。ヒョウモンの飼育準備の為、三木先生(福崎町新)から世界最大のスマレ(パピリオナセア)を戴き来年の準備を始めている。

先輩諸兄の御指導、御援助を御願ひ致します。